

パンカジェネ河流域の土地利用

——山地と海岸の対比の視点から——

高 谷 好 一*

Landuse along the Pangkajene River, South Sulawesi

Yoshikazu TAKAYA*

Wet-rice cultivation in Bantimurung, a mountain village located on the upper reaches of the Pangkajene river, is characterized by non-plow cultivation in small swales surrounded by limestone cliffs. In Labakkang, a small town located near the mouth of the same river, the plow is a fundamental tool for rice growing. Besides rice cultivation, fish-raising and salt-making are important activities. This is an area where landuse is more or less commercialized. From the view point of rice-

culture geneology, Bantimurung's rice culture is genuine Malay, as indicated by the practice of *appocca*, or preparing the soil by trampling, while that of Labakkang is characterized by many elements of Indian origin. South Sulawesi's agriculture can thus be seen as a combination of mountain agriculture, which is economically self-contained and culturally more Malay, and coastal agriculture, which is more market-oriented and more Indian in origin.

まえがき

この小論では、パンカジェネ (Pangkajene) 河流域にある二つの集落の土地利用の描写を行なっている。二つの集落とは、一つはこの河のほぼ最上流にあるバンティムルン (Bantimurung) であり、いま一つは下流の三角州にあるラバッカ (Labakkang) である。この2集落の実態をみることによって、環境形成史という観点からみた時の、南スラウェシの山地と海岸の意味を考えてみようとするものである。

I バンティムルンの土地利用

バンティムルンは石灰岩山地の深い山ふとこに抱かれた仙境にも似たところである。ここはほぼ完全な自給集落であり、3種類の農地を持っている。石灰岩凹地の湿田と非石灰岩地帯の棚田、それに焼畑から転じたと思われる畑である。このうち、石灰岩凹地の湿田は、現存する面積においても、また長い歴史を持っているという意味においても、最も重要な農地である。以下、この章ではこの湿田を中心にバンティムルンの農業を概述してみたい。

* 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

I-i 石灰岩凹地の稲作
a) 石灰岩凹地の環境

バンティムルン近辺の地質は石灰岩と火山岩、砂岩、頁岩などからなっている。そのうち、石灰岩は南画風の絶壁をいたるところに直立させ、その景観は剛的である。一方、その他の岩は丸味を帯びて緩やかな斜面を作り、その風景は女性的である。土壌的にもこの二つはまた対照的である。石灰岩地区はふつう土壌を欠く。ただ、絶壁で囲まれた凹地などに、少しばかりの黒土がつめ込まれているといった感じである。これに比べて、非石灰岩地区では赤味を帯びた粗粒な土が斜面を比較的広く覆っている。

石灰岩凹地は、いわゆるカルスト凹地である。すなわち、地下溶融で空洞を生じた石灰岩地盤が陥没し、その結果生じた凹地である。したがって、凹地自体はけっして平坦ではなく、デコボコしており、石灰岩の岩塊で満ちている。沖積平野のような厚い土壌の発達はなく、わずかばかりの黒色粘土がそうした岩塊の間にたまっているといった格好である。

こういう地質状態であるから、漏水や湧水が多く、水条件は極めて特異である。実際に圃場をみてみても、ふつうの水田と異なるところが多い。例えば、田植え期に最もよく目につくことは、満水した田面に直径20-30cmぐらいの渦を生じて、水が地下に落ち込んでいることである。こうした落込み穴はルバン(lubang)と呼ばれている。ひどい場合は、1筆に2カ所も3カ所もそういうのがある。百姓はこういう吸込み穴をみつけ次第埋めているが、それでもまた、新しい穴から落ち込んでいるのがみられる。私がバンティムルンでみた最大の割れ目は石灰岩に接して、幅2m、長さ10m、深さ4mのものであった。さすがに、こうした大きな割れ目は埋めることはできない。その周辺に一種の築堤を行なって、水の落ち込むのを防いでいる。また、これほど大きくなくとも、埋められないところは土をもって穴を囲み込んでいる。また、

こうして囲み込まなければ穴がどんどん大きくなるという。

逆に、田中には稀に自噴孔がある。こういう自噴孔のまわりには、これまた小さい土手を築いて、そこを一種の池にしている。図1に自噴孔と記したものは湧口の直径2-3cmであるが、それを中心に直径4mぐらいのところを池としている。また、ところによっては、金魚藻に似た水草の生えた沼があるし、腰までもぐるような極めて泥深い田もある。植付け準備期に、私どもはここを歩いたが、こうした水田がいかに歩行しにくいものであるかは十分に思い知らされた。不注意に歩くと、突如非常な深みに落ち込むし、もっと悪いことには、溶融されて刃のようになった石灰岩の角が、泥中といわず地表といわず、いたるところにあるのである。私どものひとり、バランスを失した拍子にこうした岩の一つにもたれかかって腕を切ったことがある。

b) 稲作の模様¹⁾

本田準備

本田準備の方法を画一的に述べることはできない。なぜなら、田面の様子が実に千差万別だからである。例えば、非常に泥深い田では人々は素手でそこに入って、手と足で草を踏み込んで (appocca), それで地ごしらえとする。それほど泥深くなくても、岩塊がいたるところに突っ立っているようなところでは、体を岩の間に滑り込ませるようにして鍬で田打ちをすることもある。

畜力を利用する前には、踏耕 (appocca) が一般に行われていた耕法だという。動物と犁の導入後も、土地の事情によっては踏耕が行われていた。現在でも数筆の深田では踏耕が行われている。水牛による蹄耕 (appabonda) は現在はないが、昔はしていたといわれる。それによれば、2-3人が共同で水牛を10-15

1) ブギス地域での稲作については Pelras [1974] を参照されよ。

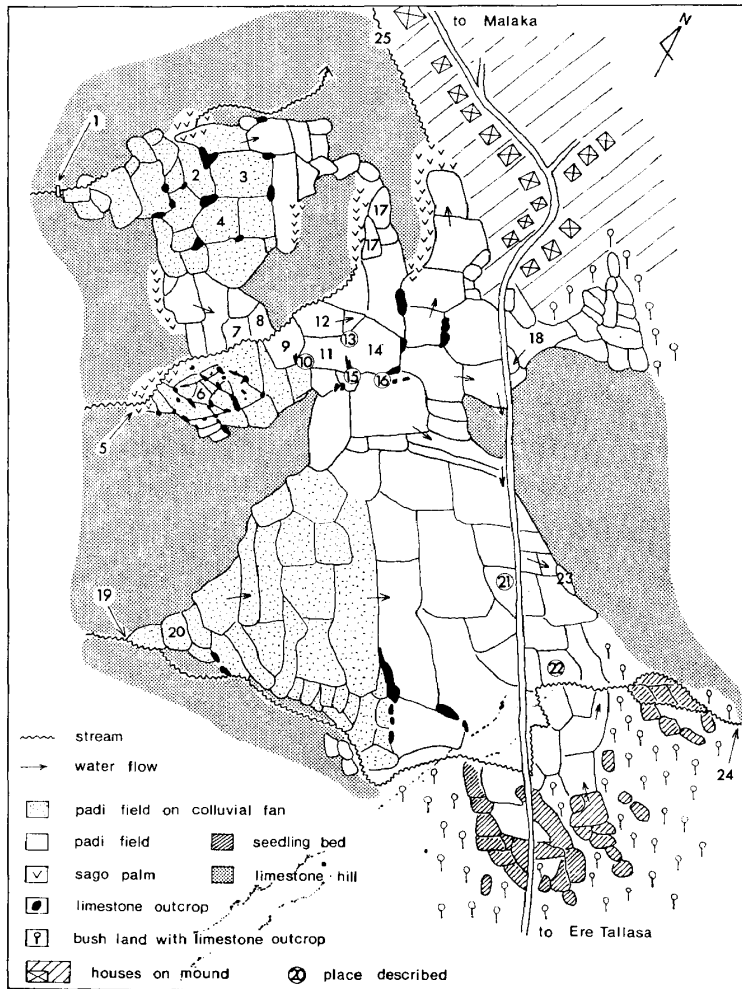


図1 バンティムルンの水田（測量を行っていないので、境界は模式的なものである）

図1に番号で示された地点の説明

- ① 井堰。幅約2m。水位は約0.5m高められる。この井堰の上流にも、1960年代に開田された水田がほんの少しある。
- ②～④ カラエンの祭田。
- ⑤ 幅1mの流れ。まわりにはサゴヤシ多し。
- ⑥ 石灰岩の小露頭が極めて多く、極端な場合に

頭集めて、①水牛を田に追い込んで3回ぐらいまわる、②5日から1週間ぐらいして草が腐るのを待って砕土板を曳き、その後水を溜めておく、③さらに3日ほどして手で雑草をとる、④さらにまた3日ほどして田植えを始める、といった具合であった。

現在ではしかし、ここにはすでに確立した

は、岩の間に身をすり入れて鍬がけしなければならない田。

- ⑦～⑨ 1981年現在、アポッチャで本田準備をしている田。
- ⑩ 田中にある湧水。湧口を中心に直径4mぐらいのところを土手で囲って池としている。
- ⑪～⑫ 金魚藻に似た水草とオモダカに似た草多し。ほとんど年中湛水している。泥深く、膝あたりまでもぐる。
- ⑬ 湧水。これを取りまいて直径2mぐらいのところが土手で囲われ池となっている。
- ⑭ 泥深い田。ところどころに膝ぐらいまでもぐるところあり。
- ⑮ 直径5cmぐらいの吸込み口。湛水期には、ここから盛んに地中に水が落ち込む。
- ⑯ 石灰岩が直径7-8mで環状にならび、その中央が緩い泥土を持つ池状になっている。
- ⑰ 極めて泥深く、年間の多くの期間湛水している。この田では、1981年現在、アポッチャを行なっている。
- ⑱ この周辺は広く、泥の薄い田が続く。湛水させるのが困難な田。
- ⑲ 幅1.5mの川。
- ⑳ 泥深くはないが、極めて長期に湛水するらしく、金魚藻に似た草多い。
- ㉑ 直径10cmぐらいの吸込み口。
- ㉒ 直径1.5mぐらいでジョーゴ型に開いた吸込み口。そのまわりには土手を築いて、水の落ち込むのを防止

している。

- ㉓ 石灰岩に接した水田中の割れ目。幅2m、長さ10m、深さ4m。
- ㉔ ㉑と同じ川。ここでは幅0.5mにせばまり、水量も著しく減じている。
- ㉕ 川①、⑤の末流。幅4mになり、水量は著しく増大している。

犁耕耕作法があり、それは次の通りである。すなわち、まずパジェコ (pa'jeko, ブギス語では rakkala) と呼んでいる犁をかける。これは2頭曳きで反時計まわりにまわる。その後10日ほどして、耕起された土が柔らかくなったところ、イサラ (isara) と呼んでいる砕土板を曳く。これは長さ1.5mぐらいの一種

のエブリである。重しをつけるために、泥や草をおいたり、幼児がその上にのったりする、これを牛に曳かせる。そして、その直後にもう1度犁をかける。これはバリッ (bali') と呼ばれる。その後、中2日ほどおいて、今度は馬鋤をかける。馬鋤はサラガ (salaga) と呼ばれている。サラガかけの目的は砕土と均平化であるが、これは次の4段階を経て漸次仕上げへ持ってゆくという。サラガ・タムバン (salaga tambang), サラガ・タムバン・ビチュ (salaga tambang biccu), サラガ・パシアラ (salaga pasiara), それにサラガ・パッレバ (salaga palleba) である。こうした作業は共同 (makkio, 原義は「人を呼ぶ」) で行われるので、多い時には1筆中に20頭、すなわち10組もの牛が入って壮観であるという。サラガ・パッレバの終わった田は土の塊がなくて、ちょうど小麦粉をといた時のようにドロドロしていなければならないという。

雨が降り続いてあまり水が多いと土が塊になってしまい砕れにくいので、サラガを何回も繰り返さねばならない。また、最初の雨は2週間ほど続くが、やりかけた田はこの期間内に本田準備を終えてしまわねばならない。何故なら雨が上がって圃場が乾いてしまうと、もう1度初めからやりなおさねばならない (kapoleang) からである。もし、半分やりかけて、そのままずっと雨が来ないと、休耕田 (ku'lang) にせざるをえない。灌漑のないところでは現在でもそうであるが、昔はこうした休耕田が多かったという。

本田準備が始まると、それと並行して畦ぬり (a'tung kasa) を行わなければならない。これは、水を保つためと、ネズミがそこに住まないように行う。鋤で下の田から土を畦に上げ (pa'buat'), 上の田の壁から手でぬって (jampi) ゆく。これをするのは上の田の所有者である。

耕起の終わった水田には木の葉 (daun ja-

mbu biji) をその中央に立てる。これは水牛や人が入ってはいけないことを示すためのものである。

苗代

苗代準備 (pallapak binenge) は次の順序で行われる。①鋤がけ、②水を入れる、③砕土板 (イサラ) をかける、④犁をかける (バリッ)、⑤再び砕土板をかけ、5-10 cm の水深に保つ、⑥1日おいてから播種を行う。このように苗代田には馬鋤はかけない。理由は深耕すると、苗が張ってしまっていて苗取りがしにくいからだという。こうして播種された苗代は水牛や猪が入らないように厳重な柵囲いをする。

播種用の種子作りは、種籾用に残してあった穂束を男がゴザの上で足で踏みにじって行う。そして、これをココヤシの葉で編んだ袋 (kamboti) に入れて2昼夜流水につける。その後、家に2-3晩おいておくで催芽するので、これを苗代に播く。

苗代の位置は特異である。村には苗代地というものがいくつかあって、そこに村の苗代の総てが作られている。こうした苗代団地は図1に示されたように、湿地の外側に、むしろ石灰岩の露出する高みにある。より正確にいうと、高みだけけれど水を引いてこられるような位置にある。そうした位置は広いまとまりを持っていない。したがって、1筆ずつの苗代は猫の額のようなところに作られていて、それが岩塊と藪に挟まれて、高位、低位さまざまなところに散らばっている。

籾の浸水から播種までの間には、いろいろな儀礼がある。一部は Pelras [1974] に報告されている。しかし、ここではそれははぶく。催芽した種籾は田の持主の男が播く。播種時には苗代は湛水していなければならない。しかし、播種後3日たつと落水する。どの苗代にも、その内周にそって幅20 cm ぐらいの浅い溝が掘ってあるが、この溝にも水がなくな

るくらい落水してしまう。苗代はほとんど乾いた状態になるのである。そして、この状態で苗取りまで経過させる。いわば、半分陸苗代のようなものである。何故落水させるのかと聞くと、三つの理由を挙げる。第1は昔からそうやっているからであり、第2は落水しないと苗が *lu'mu'* (弱い、軟らかい) になって葉先が枯れてしまうからであり、第3には落水しておかないと苗取りの時抜きにくいからだという。

播種後1カ月ぐらいうると、苗代に水を少し入れて苗取り (*manrembu*) をする。これは若い女が多勢で行う。苗代にしゃがみ込んで、まるで畑の草をとるように苗をむしりにとってゆく。そうして、一握りずつおいておくと、他の一群の女が近くの水溜りに運んで、その根を洗い、すねや腕に打ちつけて泥と砂を落す。水が苗代にある時は水面に打ちつける。こうしてきれいにされた苗は、樹皮で作った即席の紐で直径25 cm ぐらいの束にしばられる。この時、長大すぎる苗はその先が切り落され、25 cm ぐらいのものに揃えられる。こうした束は、やがて男によって天秤棒で田に運んでゆかれる。

成育中の苗はどれをみても、過密で極めて発育が悪い。肥料も10日目にウリアを少し入れるぐらいで一般にほとんどやらない。しかし、百姓たちによると、これは意図的にそうやっているのだという。ここでは種子を播く時、一度播き、その上にもう一度重ね播きをし、さらに最後にもう一度その上へ播種して、意識的に厚播きにする。もし薄播きにすると、苗はみずみずしく肥って、必ずネズミのえじきになってしまうという。線香苗だとネズミも襲ってこないから、わざと線香苗にするのだというのである。彼らは、この三重播きは海岸のラバッカなどには知られていない山地独特の手法だという。

植付け後

最後の馬鍬であるサラガ・パッレバが終ると、すぐ植付けに入る。植付けもまた共同作業で行われることが多く、主として女が行う。植付けは指で行い、植付け棒などは用いない。1株に3-4本の苗を20-25 cm 間隔で5株ずつ、うしろに下がりながら植えてゆく。最初に田の長辺に平行にまん中に1列だけが植えられる。正条植えは除草の便利のために最近導入されたものである。

植付け後1週間すると落水して、3日間田を乾かす。植え付けた直後の水は汚れていて、これは入れ替える必要があると考えられているのである。こうして3日間、田を乾かしたのち、再び湛水する。この湛水はふつう刈取り期まで保たれる。稲が黄や赤味 (*ca'ral-la*) を帯びてくると、また水を抜いて乾かす (*mabikasa'*)。もっとも、乾田にすると雑草の成長が旺盛になる。

植付けが完了するとすぐ柵作りに入る。村の水田を全て柵で囲い込むのである。一番端に位置している水田の保有者ないしは耕作者が、柵を作る義務を負う。隣部落のマラカ (*Malaka*) では柵を作ってから田植えを行う。除草 (*accapo*) は分蘖期に1度行う。この時、畦の草を竹へら (*pabarrasa'*) でそぐ。これはネズミが畦に巣を作るのを防ぐためである。除草は稀に2回行う人もいる。このころ害虫防除のための薬剤散布を行う。この部落では、この目的のための噴霧器の普及が驚くほどよく行われている。

刈取り (*a'kattong*) は穂摘み具 (*pakkatto*, ジャワのアニ・アニと同じ) で穂首だけを刈る。女たちがここではカネジャ (*kaneja*) と呼ばれるコテを手にはめて、大きなかぶり笠を皿状に頭において収穫してゆく。ふつう、新品種の脱粒性の高い品種が入ると鎌が用いられ、根刈りになるものであるが、この部落では75%が IR・42 などの新品種であるにもかかわらず、いまだに穂摘みをして屋根裏

(panakkang) に貯蔵する 方法 がとられている。

この水田には本来裏作はなかった。しかし、近年では一部の水田に大豆が裏作として作られるようになったし、また焼畑ができなくなったので、トウモロコシを植えることも行われる。ごく一部の水がかりのよいところでは、3毛作の行われるところもある。この場合、1月から5月までが稲、6月から9月までが大豆、そして10月から12月までがトウモロコシである。

時差耕作

バンティムルンでは苗代はほぼ3段階に分けて播種される。早播苗代、中播苗代、晩播苗代である。そして、それらがそれぞれに団地を作る。早播苗代が播かれて20日すると中播苗代が播かれ、さらに15日すると晩播苗代が播かれるという。1980/81年の場合、早播苗代は12月16-17日（新暦、以下総て新暦）に播かれた。

特筆すべきことは、苗代だけでなく本田自体がいくつかの地区に分けられ、各地区は決まった作季を持っていることである。こうしたことの行われる理由は、村人によると極めてはっきりしている。登熟期に入ってから稲を野獣から効果的に守るためである。ここは野豚が極めて多く、猿も多い。昔は鹿も多かったという。彼らにいわせると、刈取り前の半月ぐらいが勝負時だという。この時期には、村の総力を挙げて、こうした動物と対決しなければならないのである。彼らは稲田全体を厳重な柵で囲い見張り小屋を建て、昼夜兼行で見張りをする。彼らによると、この見張りは一度に村の全ての田で行うことは不可能である。したがって、少なくとも水田を作季の異なる3区に分け、それぞれの地区に刈取り前の半月ずつ、集中的な管理が行えるようにするのだという。しかし、現実には作付時期は降雨状況と各水田の水利とを計算に入

れて、湛水確保の難しい圃場を優先的にを行い、灌漑田は最後にまわすようなことになっている。また、動員できる労働力に応じて仕事を進めてゆくような傾向もみられる。柵作りがとかく最近おろそかになりつつあるのと軌を一にして、伝統的なきっちりとした時差耕作がくずれつつあるのかもしれない。

稲作作業の中で最も忙しい仕事は、この柵と見張り小屋作りである。早生地区では2月後半には柵作りが始まる。晩生地区の植付けは3月上旬まで続く。だから、2月後半から3月上旬にかけては、女は田植え、男は柵作りを行う。柵作りは3月、4月が中心で、もっぱら男たちの共同作業として行われる。

深い山中で広大な森に囲まれて行う稲作では、何にも増して獣害対策が重要である。森が消滅し、農地が高密度で広がってしまった日本などでは考えられない状況である。柵による防禦を確実にするために時差耕作とでもいってよい方式を編み出し、村が全会一致して、この申し合わせを守っている。こうしたものをみていると、何かしら、ここは柵社会とでもいってよいのではないかというような気さえしてくる。少なくとも、それは私どもが日本でなれ親しんだ水利慣行にしばられた稲作とは全く異質のものである。

c) カラエン (karaeng) の田と始耕祭

いい伝えによると、バンティムルンへの水稻の導入は13-14世紀、のちにこの村の王になるカラエン・バンティムルン (Karaeng Bantimurung) によってなされたという。それ以前ここには焼畑の陸稲しかなかった。そのカラエンの田というのがこの集落に残っていて、最後のカラエン在世中は毎年そこで田植え始めの祭りが行われていた。カラエンの田とその田植え始めの祭りをみることは、このあたりにおける最初的水稻耕作のありさまを知る手がかりになるのかと考えるので、そのことについてふれてみる。

田植え始めの祭り

一定の水田区画ごとに水田の耕起始めと田植えの開始は儀礼的に決められており、それより以前に耕起、田植えを行うことは禁止されている。これは広くブギス・マカッサル人の社会にみられることで、例えばシドラップ(Sidrap) 県ではこの伝統を政府が利用して、灌漑水導入後の作季の地域ごとの割当てを細かく決定している。また、マカッサル語でアップパリリ(appalili)と呼ばれる始耕祭もそのようなものの一つである。バンティムルンでは、このけじめをつける祭りが田植え始めとして残っている。²⁾ 現在はピナティ(pinati)と呼ばれる祭司が毎年星をみて田植え始めの日取りを決め、その水田区画に田を所有する村人は、ピナティがその水田で田植えを終えてからのち、初めて自分たちの田植えを行うことができる。

カラエンの制度が公式になくなった現在では祭田には村人が集まらなくなったが、昔はカラエンの田植えの時には、モスク、水浴場で使者が何日に田植え始めを行うと告げると、村人が当日祭田に集まり、何十頭という水牛が一斉にサラガかけをし、その直後に女性が田植えをした。これらの仕事が始まる前の行事の一つとして、カラエンの一家が儀礼食(songkoro')を祭田の傍らで共食し、水牛を屠って人々にふるまったという。なお、戦前には水牛でなく人の足による踏耕が伝統的にこの祭田で行われていたらしい。すでに現在では、いずれの祭田でも踏耕は行われないが、昔の祭田の一部で、分割相続された数筆の水田は、泥深いためにいまでも踏耕しか行われていない。

祭田の立地

- 2) もう一つ山奥のトンドンクラ(Tondong Kura)では、昔は appalili がここでもあり、ピナティが始耕祭をして7日後に初めて一般の者が田仕事を開始できたという。

カラエンの祭田は石灰岩低地の湿田の一つである。もっともしかし、近年カラエンの田は元の姿がかなり変えられた。例えば、あるカラエンの祭田では、そこに土砂が流れ込んでずいぶん水はけのよい浅い田になってしまった。また、やはり近年のことであるが、土地利用が高度化されるとともに、田の近辺、特に田中の樹木が切り払われて、全体的に木のない明るい場所になった。そのほかに社会的な変化もある。例えば、オランダ時代に祭田が職田に指定された経緯や、それがカラエン制度の廃止とともに土地所有が細分化された事実もある。このような事実を頭の中に入れて、現在の祭田の状況から、本来の祭田の環境を推察、復元してみると、それは次のようなものになる。

まず何よりも、祭田はうっそうとした林の中にあった。しかもそれはふつうの林ではなく、三方を石灰岩の急崖で囲まれた一種の地の底のようなところである。まわりの急崖は常緑の木や蔓で覆われている。さらに、凹地の中に点在している石灰岩の小岩塊も常緑樹で深く覆われている。こんな状態だから、凹地は熱帯雨林の緑の中にできた落とし穴のような格好になっている。

最初の耕作としては、こうした中で点在する緩傾斜部に焼畑が行われたであろう。落とし穴の最底部は過湿すぎて駄目であるが、急崖の裾に時に発達する崖錐は、陸稻、粟、トウモロコシ、イモ類などの栽培に利用されたのであろう。こういう焼畑耕作はかなり長期に続いたと想像される。

祭田の位置から判断すると、最初の水稲耕作はこうした崖錐の焼畑地と直接関係しているであろう。一般に、崖錐の脚部は水で飽和しており、時に湧水点をなす。崖錐中を伏流してきた水がここに滲出するのである。こうしたところは土が年中軟らかく、踏みつける

とすぐ泥化する。畦を築き、踏みつけさえすれば、そこにはすでに水稻を植え付けるのには好適な状況が簡単に作り出せる。さらに推察を重ねると、おそらく当時導入された稲品種は畑でも水湿地でも生きられるような稲であったのであろう。このことは、いまでも南スラウェシにはそういう稲が散見できることから想像できる。こうしたいわば水陸両用の品種は、この新しく作られた崖錐脚部の水田でおおいに繁茂しただろう。想像するに、その時稲は、たぶんはこの新開の水田から、それより上位の焼畑へ、あたかも連続するような形で作られたに違いない。

最初の水田がこの凹地の中でも最底部の沼的なところに導入されたものでないことは、この祭田地域のその後の水田の拡張をみても明らかである。土地の人は祭田周辺については1筆ずつの開田時期をよく知っているが、一般に、より沼的なところというのはほとんどが17世紀や18世紀など後世の開田である。要するに、開田は崖錐に近いところからより低い沼地へ広がっているのである。

バンティムルン以外にも、このあたりのカルスト凹地にはカラエンの田というのがある。その一つは、約1km東のエルタラッサ(Ere Tallasa)であり、いま一つは5km東のマニアンパ(Manyampa)である。こうしたところの状況も考え合わせると、カラエンの田の立地については次のように一般化することができる。

イ. 石灰岩急崖の下の崖錐脚部に位置している。

ロ. その中でも特に大きな湧水、もしくは湧水に濫灌された流れの近くにある。

ハ. 水分は十分に供給されるが、けっして、いわゆる沼的環境ではない。むしろ、緩傾斜の湧水点付近という位置を占めている。

最初の水田は上のような水文的環境を持つ

ところに、まわりを極めて深い森に囲まれて、しかも犁耕なしで行われたのであろう。かつて祭田で行われたと思われるアポッチャ耕作は、現在では祭田の近くの数筆にしか残っていない。しかし、1950年代までは、まだ一般の水田にも時にみられたという。現在アポッチャを行う数筆は図1に示してある。

I-ii 畑と新田

石灰岩凹地の水稻耕作だけがバンティムルンの農業でないことはすでに述べた。ほかに畑と棚田がある。

a) 畑

いまでは焼畑は極めて少なくなってしまうている。むしろ、常畑ないしは準常畑とでもいべきものが中心を占めている。

常畑が発達するのには二つの立地がある。一つは先に議論した石灰岩の崖錐のうち、湧水点より上の高燥部である。いま一つは、凹地中に亀の甲状に盛り上がった一種の小台地の上である。こうした畑地でふつうに作られるものはトウモロコシである。10月に播種し、1月に収穫する。そして、そのあとにはすぐ鋤をかけ、大豆かもう一度トウモロコシを作る。いわゆる2毛作である。

準常畑といっているものは、多くは非石灰岩の緩い赤土の斜面にあって、常畑より粗雑な外観を呈する。トウモロコシが圧倒的に多く、その中にサトイモやキャッサバ、ショウガ、カボチャ、さらにはバナナ、パパイヤなどが混作されている。こうした一見焼畑的な作物の混在が、この準常畑を粗雑にみせる。準常畑では、最初の2年ほどはトウモロコシを多く作るが、やがてキャッサバとバナナが多くなり、草も多く混入してくるという。こうなると、またそこを新しく開きなおし、トウモロコシを植える。いわば一種の切替え畑である。

以上のものとははっきり違った外観を呈するものに、家の近くの菜園がある。ここには、キャッサバ、サトイモ、ナス、トーガラシ、ケートー、ネギなどの野菜のほかに、バナナ、砂糖キビ、パパイヤなどが密に植えられている。この場合のキャッサバは葉を食うための野菜である。こうした作物が年中家のまわりに緑を保っている。この菜園の面積はしかし、それほど広くない。

畑を全体として見渡すと、このように、家のまわりの菜園には野菜を、そして離れた畑にはトウモロコシを作るとというのが基本的な構成である。トウモロコシは若いものをそのまま食うこともあるが、ひき割りにして米と混ぜて主食として食べる。大豆はごく近年になって作られるようになったものである。いまでもあまりここでは食われず、むしろ一種の換金作物になっている。

b) 棚田

ここで棚田といっているものは、火山岩や砂岩、頁岩など、非石灰岩地帯に広がっている。山腹を緩く這い上がっていて、多くの場合、赤味がかった黄色の土壌を持っている。

村人はふつう水田を、その水条件によってタナ・バラン (tana balang) とタナ・ランコ (tana rangko) に二分する。前者は水持ちがよく、たとえ干天が続いても、どこからか水が集まってきて、かなり長い間湛水する水田である。一方、後者は雨が降ると一気に畦を越す冠水があり、しばしば洪水害をさえ起こすのであるが、降雨が停止すると、早い場合には数時間にして、おそくとも1-2日のうちにはその水をなくしてしまう田である。そして、日が照り続けると、すぐに地割れ (te'ngere') が起こる。おおざっぱにいうと、前者はカルスト凹地の湿田にあたり、後者はいまここで述べている非石灰岩地帯の棚田にあたる。

棚田でもその農作業は石灰岩凹地のそれと

変らない。縦、横に犁をかけ、イサラで碎土し、もう1度犁をかけて、そのあとを馬鋤でならす。そして、その直後に指で植え付ける。ただ、人々は湿田との違いを次のごとくいう。本来、田植えは女だけの仕事であるが、そこでは男もしなければならぬと。何故なら、このタナ・ランコ地帯では、雨が降ってもアツという間に水が引いてしまうので、短時間のうちに田植えを完了してしまう必要がある、そのためには、なりふりかまわず男も田植えに参加する必要があるのだと。

こうした棚田はまたガルン・バックカ (galung bakka) とも呼ばれている。新開田という意味である。その開田がいずれも極めて新しいからそう呼ばれているのである。ところで、同行の Ohara 氏 (郷土史家) によると、このガルン・バックカはたとえいまから100年たったとしても、なおかつガルン・バックカでしかありえないのだという。ガルン・バックカは時間がたったというだけでは、一人前の水田には入れてもらえないのである。同氏によると、厳格な意味における水田というのは例の石灰岩凹地の湿田だけでしかないのだという。山地における、人々の水田というものに対する潜在的なイメージを垣間みたような気がした。

II ラバッカンの土地利用

ラバッカンは海岸平野に位置していて、稲作と養魚と製塩を行なっている。それは幹線道路にも近く、都会的でもある。かくして、その風景や生活の様子はバンティムルンのそれとは全く異なる。以下には、このラバッカンの自然環境と土地利用について述べたい。

II-i 三角州の景観

パンカジェネ河は海岸にいたると、そこで見事な三角州を広げる。三角州の扇頂から海岸までの距離は約10 kmである。ラバッカ

はこの三角州が持つ数個の分流の一つに接している。ここは古い港町でもある。ラバッカ
ン以外にもこの三角州には、いくつかの古い
港が報告されている。北からラバッカ、シ
アン (Siang), パチェロン (Paccelong) であ
る。いまの県都、パンカジェネは現在の本流
ぞいに位置している。これらの新, 旧の港町は
いずれも似たような
立地を持っている。
海岸部より 5-6 km
入り込んだ、感潮帯
の上限という位置で
ある。おそらく、三
角州を流れる本流が
その河筋を変えるた
びに、港の位置は変
り、しかし、いつも
感潮帯上限という位
置を選択し続けたの
であろう。

地形的にみると、
パンカジェネの三角
州とその周辺は図 2
のように分類でき
る。すなわち、同河
川の分流網が支配す
るいわゆる三角州と、
河川よりも海が
より大きく支配する
瀕海帯よりなる。そ
して、これらの背後
に段丘と丘陵があ
る。瀕海部で最も典
型的なものは砂州と
潟であるが、その背
後に三角州との中間
的なものとして干潟
がある。段丘は低位
段丘と高位段丘に分

けることができる。低位段丘は低平でほとん
ど傾斜がなく、まだ海岸平野という感じがす
る。一方、高位段丘になると、起伏が大き
くなり、その地表は赤土で覆われていて、む
しろ丘陵の仲間という感じになる。

図 3 には同じ場所の土地利用が示してあ
る。ここには、水田、養魚池、塩田、マング

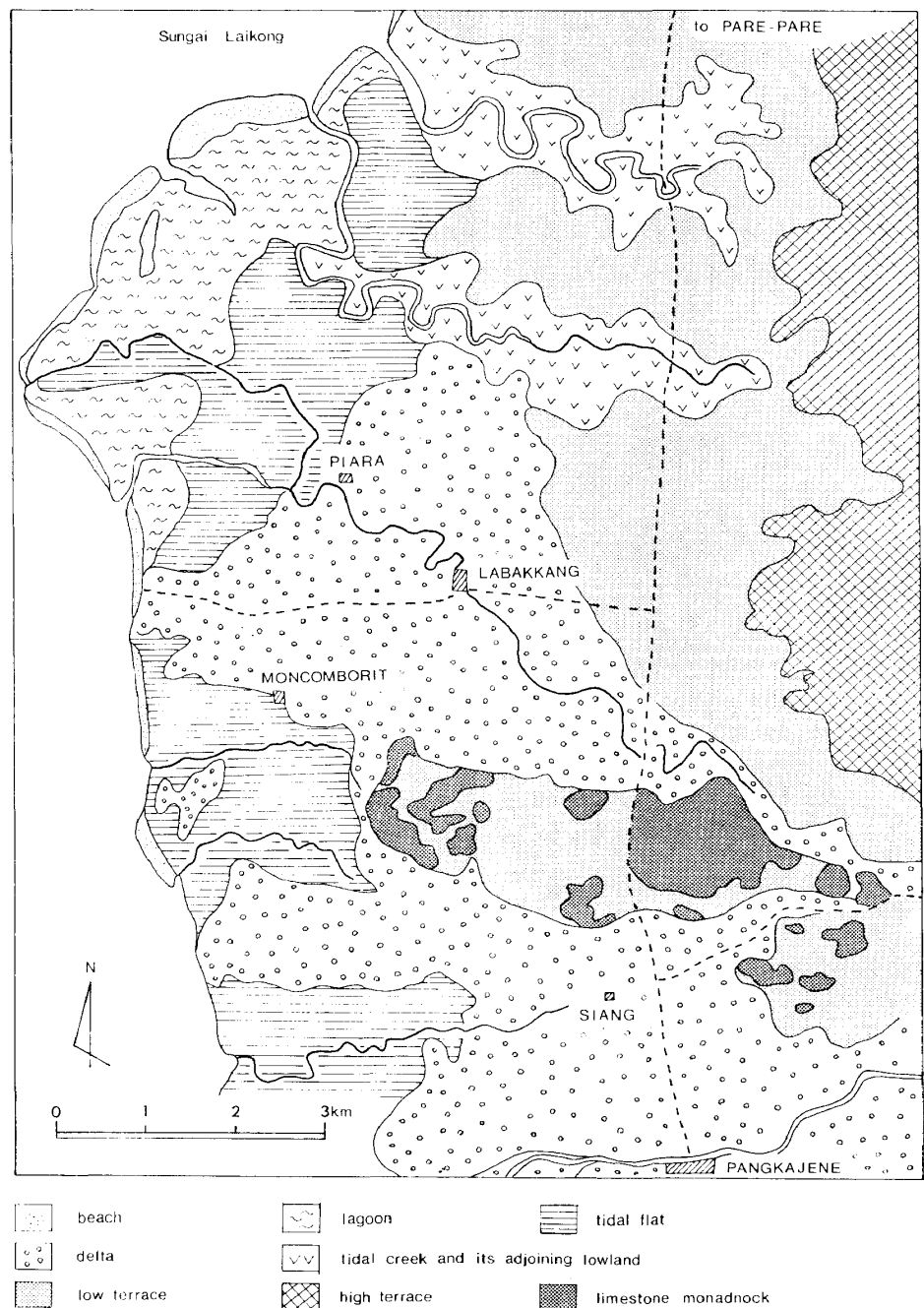


図 2 パンカジェネ三角州の地形分類

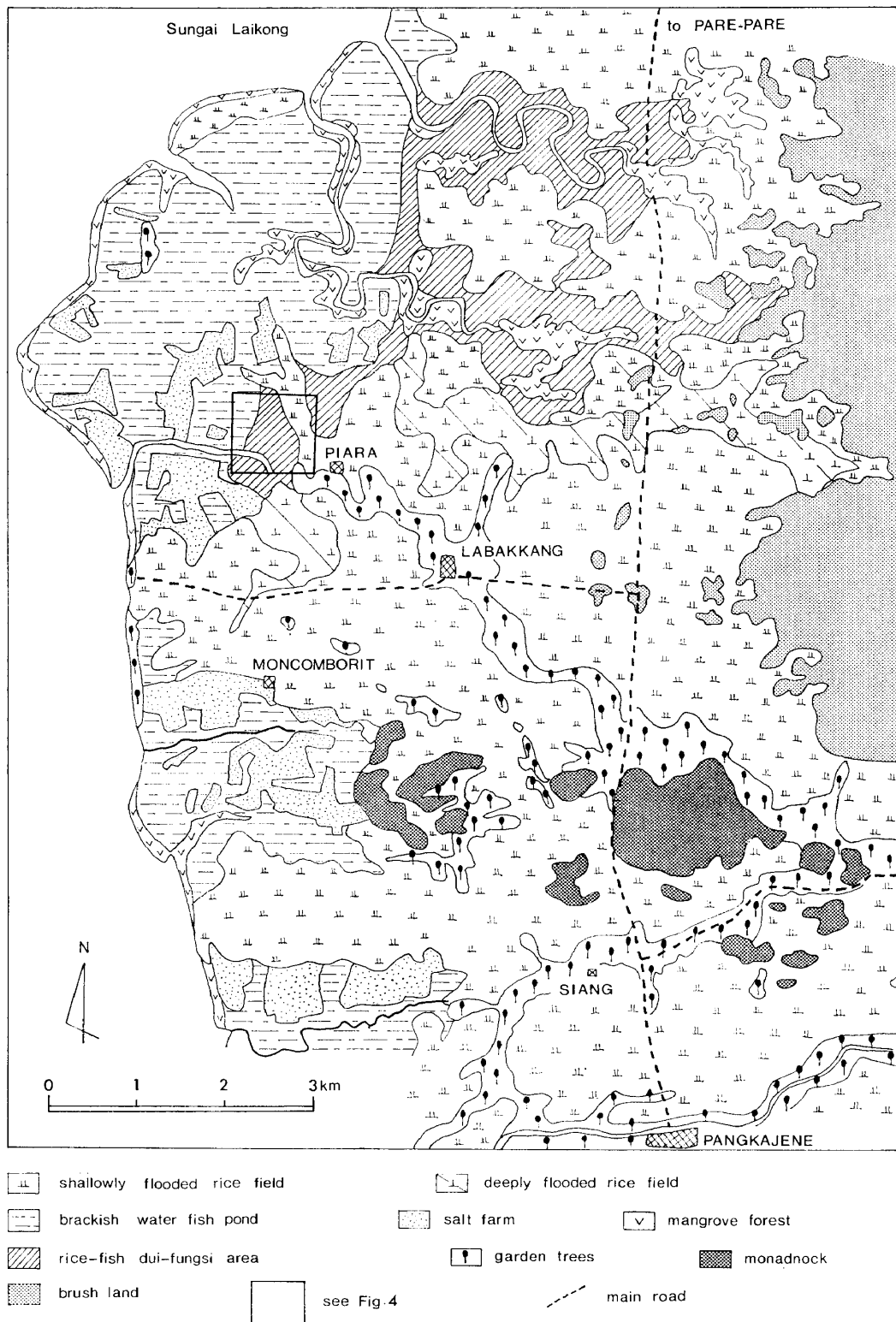


図3 パンカジェネ三角州の土地利用

ローブ・ニッパ林、藪・疎林、独立丘が識別されている。この土地利用図は、1960年ごろ撮影の航空写真をもとに作製したものである。この図からもわかる通り、海岸地帯の土地利用の主たるものは、第1が三角州高位部と低位段丘上の稲作であり、第2が三角州低位部ならびに潟における養魚と製塩である。以下に、それらの土地利用の概要を示す。

II-ii 稲作

稲作の基本的な作業は、三角州上でも低位段丘上でもそれほど変らない。ともに天水1期作である。

a) 標準的な稲作作業

苗代

苗代は毎年決まったところに団地を形成して作られる。それは家に近くて管理し易いことを第1の条件とし、第2に高位で水はけのよいところという条件が求められる。集中豪雨で苗が冠水死することを恐れるからである。ふつう苗代には灌漑水の給水口はないが、排水用の落とし口は設けられている。

苗代の地ごしらえは、11月の終りごろから始められる。それは1回の犁耕とその後の鍬での碎土である。12月中旬になって、いよいよ播種という時になると、人々は浅く湛水した田に入って、指を熊手のごとく用いて、そこに残っている草とその根を丹念にかき集めて拾い出す。草がとり去られると、エッセ(esse)をかける。これは重いエブリで、バンティムルンのイサラに酷似している。ココヤシの幹を130 cm ぐらいの長さに切り、それを二つ割りにし、そこに直角に竹の柄をつけたものである。しばしば、この上に石塊をしばりつけて、適当な接地圧が生じるようにしてある。3-4 cm に湛水した田で、これを手で曳いて、均平化を行う。あとはそこに竹ヒゴを立て、簡単に短冊型に区切り、落水して、催芽粃を散播する。播種後には、たいていの

苗代は低い柵で囲い込まれる。これは、鶏や水牛が入り込むのを防ぐためである。

発芽した稲が2 cm ぐらいになると、初めて浅く水が溜められる。これはその後、原則として苗取りの時期まで貯えられるはずなのだが、実際にはしばしば干上がってしまう。それでも百姓はあまり気にしない。苗はこういう状態で30日ほど苗代におかれる。

本田

本田準備はまず犁耕に始まるが、これは2頭の水牛に曳かせて行う。ふつう2アダワン(adawan)³⁾を1単位として行う。大きい田だと、それを2アダワンずつに分割して仕事を進めてゆく。最初は長辺に平行にすくが、1日か2日をおいて今度は短辺に平行にすく。犁は耕作者からみて、土が右側に反転するように作られている。犁床のほとんどない、マレー型のものであり、パジェコとかラッカラと呼ばれている。

ラッカラで荒起こしをしたあとには、たっぷりと水を入れてサラガかけが行われる。このサラガには長さ40 cm ぐらいはある太い爪が7本ほどついている。この馬鍬がけは極めて特異である。これだけ長い爪が泥中に突きささるのであるから、これを曳く水牛は大変である。2頭の水牛が力を合わせて曳いても、せいぜい40-50 cm も曳くと、もう土の重みでこれ以上は曳けない。そこで、耕耘者はサラガの爪を土中から引き抜いて、荷を軽くし、水牛が前進できるようにする。この爪を抜く動作は、しかし、サラガを持ち上げて行うのではない。ここには斜め前方に突き出した2本の太い脚がついているので、これを支点として、7本の爪を浮き上がらせるのである。支点を得るためには、耕耘者はただそのままの姿勢で、サラガのハンドルを急に前方に押し出すだけでよい。そうすれば水牛の牽引力と合わさって、7本の爪は浮き上がる。この

3) 水牛が2時間かかって耕せる面積。

結果、40-50 cm 曳き寄せられてきて、小さく盛り上がった泥はそこに泥の小山を残し、サラガの爪はその上を通過することになる。通過したとたんに、今度はハンドルをうしろに引き、再び7本の爪を泥中に突きさすと、それは再び泥を運ぶことになる。この動作を繰り返すと、結果的には、枕状の泥の小山がいくつもできるようになる。

この作業は水牛にも人間にも大変な重労働である。水牛はもちろんサラガを思いきり曳かねばならないのであるが、さりとて曳きっぱなしということでは、とうてい体力が持たない。かくして、人と水牛は呼吸を合わせ、なるべく無駄な力を入れないように工夫して作業を進めてゆく。このために、耕耘者は一つの小山を完成するごとに1節を終る歌を歌い続ける。そして、水牛はこの歌に合わせて、思いきり曳いたり、休んだりするのである。この作業はマッタンブン (mattambung) と呼ばれている。

サラガかけはこの1回だけで終るわけではない。2-3日おいて、今度は小山を谷に落とし込み、逆に小山であったところを谷にするように土を動かす。この作業はマギリン (maggiling) という。このマギリンのあとに、さらにもう一度全体を平らにするためのサラガかけをする。これをマラッパ (mallappa) という。最後に足で田面を平らにする (malluta)。これで本田準備は完了する。

以上がふつうにみられる本田準備である。実際には個人差があって、必ずしも上の方法ばかりが守られるわけではない。例えば、碎土と均平化のためのエスを極めて重用する人がいる。あるいは、重労働のマッタンブンを敬遠して、より短い爪の馬鍬を使用する人もいる。

植付けは現在では正条植えである。植付け間隔は土質によって意識的に変えられるが、ふつうは25 cm ぐらいである。植付け後の除

草は2回行う。植付け後、4カ月ぐらいすると、穂摘み具で穂刈りする。刈跡には水牛が放牧される。

以上、実際の農作業はラバッカもバンティムルンもそれほど変るところはない。ただし、その行われている雰囲気にはずいぶんと差が認められる。バンティムルンの場合、ほとんどの作業は共同作業で行われ、極めて賑かである。これに対して、ラバッカの場合、多くの作業は家族労働か、極めて小さいグループで行われる。

b) 稲作の地区差

くわしくみると、上に述べた稲作作業の標準型には地区差がある。地区差の主なものは以下の通りである。

塩害地区

塩害の危険のあるようなところでは、例えば、ロッダ (rodha) などという耐塩性品種が用いられる。これは他の品種と違って、茎は細いけれども極めて硬質であり、節くれ立っていて、まるでヨシのように突っ立っている。しばしば、汽水養魚池に隣接する200-300 m 幅ぐらいのところが、この品種で覆われている。異様な草形とその分布をみていると、この品種はまるで、それより内側に広がる普通稲のための防潮堤の役目を果たしているのかと思われるほどである。

塩害が起こるのはふつう3月である。このころ、もし降雨が少ないと、田面に塩を吹き、せっかく出た穂が白く変色してしまう。

深湛水地区

標準地区の場合、植付けは1月20日ごろにはほぼ完了してしまう。しかし、このころ、まだ植え付けられていないところを子細にみると、そこには極めてはっきりとした一つの傾向がみられる。未植付け地区は、海岸の養魚池に近い低地と、もう一つは低位段丘や三角州上に点在する凹地にある。要するに、局所的な凹地であり、深湛水部である。

1981年の場合、こうした深湛水部は1月24-25日ごろになって、30-40 cm はあろうかと思われる深い湛水中に、50-60 cm の長大稲が植え始められていた。それは周辺の標準的な圃場が短い苗ですでに植え揃えられ、多くは活着しているのと明瞭な対照をなしていた。

水文的にみると、南スラウェシのこのあたりでは、その湛水深は1月中旬をピークに、それ以後は低下してゆく。こういうことを考え合わせると、1月末になってから初めて行われるこうした植付けというのは、一種の減水期稲と解釈することもできる。局所的な凹地では、1月初旬の植付けは、冠水死の危険があって好ましくないのである。このように考えてみると、南スラウェシの海岸地域の稲作は次のように表現することができる。すなわち、標準的な稲作は、まず雨季作といってもよい。しかし、局所的な凹地には減水期稲が散在しているのだ、と。

苗代

苗代はふつう団地をなしていると書いた。しかし、これは必ずしも総てがその通りではない。農民たちの中には自分の持ち田の中に苗代を勝手に作っている者もいる。こうした苗代のことは、それを少し広域にみてみると面白い。パンカジェネ三角州より南に行くと、ウジュンパンダン (Ujung Pandang) を経てもっと南まで、圧倒的に団地型の苗代が多い。逆に北に行くと、パレパレ (Pare-Pare) までの間ずっと散在苗代が卓越する。要するに、パンカジェネ河口部がこの団地型と散在型の漸移点にあたっているのである。

このことは、パンカジェネ三角州より南はマカッサル人地区であり、北がブギス人地区である、ということとうまく符号している。先に標準型として記載したものは、実はマカッサルの型であったのである。ちなみに、ラバッカンはこのパンカジェネ三角州における中心的なマカッサル人の町なのである。周辺

には、ブギス人の集落も数少なくない。そういうブギス人集落では散在型の苗代が多くみられると考えられる。

ついでに、より典型的な、あるいはより原始的なと思われるマカッサルの苗代のことを、ごく簡単につけ加えておこう。これは、マロス (Maros) とウジュンパンダンとの間でよくみられるものである。そこでは陸苗代である。水田をみおろす赤土の丘陵の傾斜畑に散播苗代が作られている。

マカッサル人の稲作とブギス人の稲作とは、苗代以外の点ではあまり外見上の区別はつかない。田植えの男女分業は地域によって異なるが、これも種族差といえるのだろうか。

II-iii 養魚と製塩

a) 5種の代表的景観

瀬海部とその周辺には、養魚と製塩に関連して次のような五つの景観がみられる。

潟

潟は海岸砂州背後に広がる通年湛水部である。もともと、植被のない水面であり、いわば海の一部である。こういうところが堤防で囲まれ、1区画半 ha から数 ha の大きさの魚池に作られている。ラバッカンの西北には、この種の養魚池が広大に広がる。

こういう広大な養魚池は、たいていラバッカンのウジュンパンダンの金持ちの所有になっていて、雇われた池番がその近くに家を建て、池の見張りをしている。飼われている魚はボル (bolu, ジャワでいう bandang, サバヒイのこと) とエビである。経営は先端的な技術を駆使して、大規模かつ企業的に行われている。稚魚が放たれる前には、池は前もって排水され、薬剤で無用な雑魚や害虫が殺され、餌となる藻類を育てるために肥料が投入されるといった具合である。

干潟

これは上記の潟の周辺に広がり、干潮時には干上がり、特に乾季には長時間水上に顔を出す。こういうところは、元はマングローブやニッパで覆われていたところが多い。しかし、いまでは一木一草ない。

この干潟の標識的な土地利用は養魚・製塩の二重機能⁴⁾か、養魚・稲作の二重機能である。養魚・製塩の場合、雨季には魚が飼われ、乾季には塩が作られる。この型が最も典型的にみられるのは、ラバッカシ 西南約2 kmにあるモンチョンボリ (Moncomborit) である。

ここでは、50×60 m² ぐらいの池、A、B、C がそれぞれ堤防で囲まれていて、この3区画で一組をなしている。12月か1月、Aに体長1 cm そこそこの稚魚 (nener) が15,000尾入れられる。ここに1カ月おくと、7-8 cm に成長した若魚 (bengoro) になる。こうなると、この魚を網で捕獲するか、あるいは閘門を通して、Bの池に移す。15,000尾入れた魚は、この時点では、ふつう10,000尾ぐらいになっている。こうしてBに移した魚は、そこに1カ月半ぐらいおき、さらにCに移して、また1カ月半育てる。かくして、稚魚から約4カ月たつと、体長30 cm 近い成魚が出荷可能になる。このA、B、Cの1セットの池の場合、1作での水揚げは約3トンであるという。稚魚を育て終ったAの池には財力さえ許せば、またもう一度別の稚魚を第2期作目として入れることも可能であるが、ふつうはそうはしないという。

一方、乾季になると、この3区画が塩田としての1単位をなす。A、B、Cはその1辺が、いずれも幅3 mの水路に接している。さらに、その水路自体は幅30 mの河に連な

り、河は約700 mで海岸に出る。要するに、ここには海水が比較的容易に出入りするようになっている。塩作りの時期になると、Aは海水溜めに使われ、製塩はCで行われる。Aで海水を溜めて、そこである程度蒸発によって濃縮したものをBに送り、さらにそこで一層濃縮させる。そして、それがCに送られる。Cはちょうど短冊型苗代のように、その床が、幅2 mぐらいの高みと、幅50 cmぐらいの溝になっている。十分に濃縮された海水は最後に、この高みの上で塩として析出されるのである。雨季中、魚が飼われている間も、この製塩用の高みと溝はそのまま残されていて、それがサバヒイやエビの泳いでいる下にはっきりとみえる。

養魚にしろ、製塩にしろ、それらを能率的に行うためには、各地区は潮が自由に出入りする水路に接していなければならない。こういうことのために、この干潟地区には、幅2-4 mの水路が縦横に掘りめぐらされている。

次に、養魚・稲作二重機能のものは、干潟の中でも潮水の出入りの難しいところに多くみられる。最もふつうなものは、水田の4辺を幅2-3 m、深さ1 mぐらいに掘り、その掘り上げた土で、溝の外側を囲う土手を築いたものである。ここはもともとがふつうの水田であるから、溝で囲まれた中央部は雨季には天水田として稲が植ええられる。一方、溝の部分は深くて稲は植えられないが、魚を飼うにはちょうどよい。もちろん、魚は時に稲の植え付けられているところにも上がってきて、そこの餌をも食う。かくして、雨季中は稲と魚が共存するのである。この種の溝では、雨季中にエビは飼えない。塩分がないからである。サバヒイがせいぜいであり、多くは淡水性の雑魚である。

乾季になると稲田部分は乾いてしまう。しかし、溝の部分には水を貯えることが可能である。もし、水路で感潮河川に通ずるよう

4) 熟さない言葉であるが、現地で用いられている dui-fungsi という語を、そのままほん訳したものである。

してあれば、塩水を得ることさえ可能である。かくして、この時期また新たに、サバヒイなどの魚を飼うことができる。

砂州

ここで砂州としているものは海岸に平行した砂質の高みである。こうした上に時に水田が開かれる。しかし、何分海に近く、塩害の危険は大きい。

この砂州にも最近魚・稲の二重機能が広がっている。かつての水田に、その畦にそって内側に例の溝を掘り、その部分を養魚池として使用するのである。この場合、雨季にはサバヒイしか飼えないが、乾季にはサバヒイとエビの両方が飼える。地盤こそ高いが、海に近く、深い水路さえ掘れば、潮水を導入することは容易だからである。

砂州の場合は、しかしふつうは干潟のように塩田としての利用はできない。地盤が砂であるのと、地盤高が満潮位より高いから、何らかの揚水施設を持たないかぎり、塩田への導水ができないからである。

河筋とその周辺低地

海岸部には多くの感潮河川が入り込んでいる。こうした感潮河川の河筋には、いくつものトラップが据えられて、そこが重要な漁場になっている。トラップは2種類のものがみられる。一つは河口を越えて海中に据えられたエリである。これはビラ (bila) と呼ばれている。ビラは竹でできていて、長さは100 mを超すものがある。

河身部に入ってしまうと、エビ専門のトラップがある。上流に向けて、じょうご状に口を開けた長さ20 m ぐらいのものである。すばまった下流端には、吹流し状にふところの深い網がつけてある。この網は、ふだんは水上に作られた簡単な棚の上に乾かされているが、下げ潮が始まると、水中におろされる。こうしておくと、速い流れに押し流されたエビが、じょうご状の壁を伝って網の中に入り

込むというものである。このじょうごは大部分がサラ・サラ (sara sara) と呼ばれるマングローブの枝で作られているが、網に近い5-6mのみは竹簀で作られている。このエビ用のトラップはパンダリアン (pandariang) と呼ばれている。

パンダリアンは決まって、河の凹面になった岸の近くに建てられる。そこは水流が速く、エビが押し流されることが多いからである。そして、この網がおろされている時には、このパンダリアンには白旗が立てられる。航行する舟に注意を与え、吹流し状の網が舟に引っかけられないようにするのである。

このほか、干潮時には、人々は、しばしば河口部の浅瀬に出て赤貝を拾う。河筋はこうして、極めて重要な漁場として機能している。周辺低地はマングローブ・ニッパ林と養魚池の混在である。多くの場合、エビとサバヒイの両方が飼える。こうした土地利用の典型的なものはライコン (Laikong) 川にみられる。

自然堤防最末端

三角州と干潟の境付近は、極めて込み入った土地利用を示す。ここは、自然堤防がまさに潟に没しようとする最末端である。この意味では、陸と海との接点である。具体的な一例として、ここにはカンポン・ピアラ (Kampung Piara) 付近の様子が図4に示してある。

この図には、五つの地形区の上にのった八つの土地利用が示されている。①潟の養魚池、②干潟の養魚・稲作二重機能、③舟運路に使われるバントアロク (Bantoalok) 川筋、④旧バントアロク川でいまは養魚池になっているところ。そして、さらに自然堤防上のものとして次のものがある。⑤水田、⑥苗代地、⑦屋敷地、⑧屋敷地養魚池である。ここで屋敷地養魚池としているものは、屋敷地に

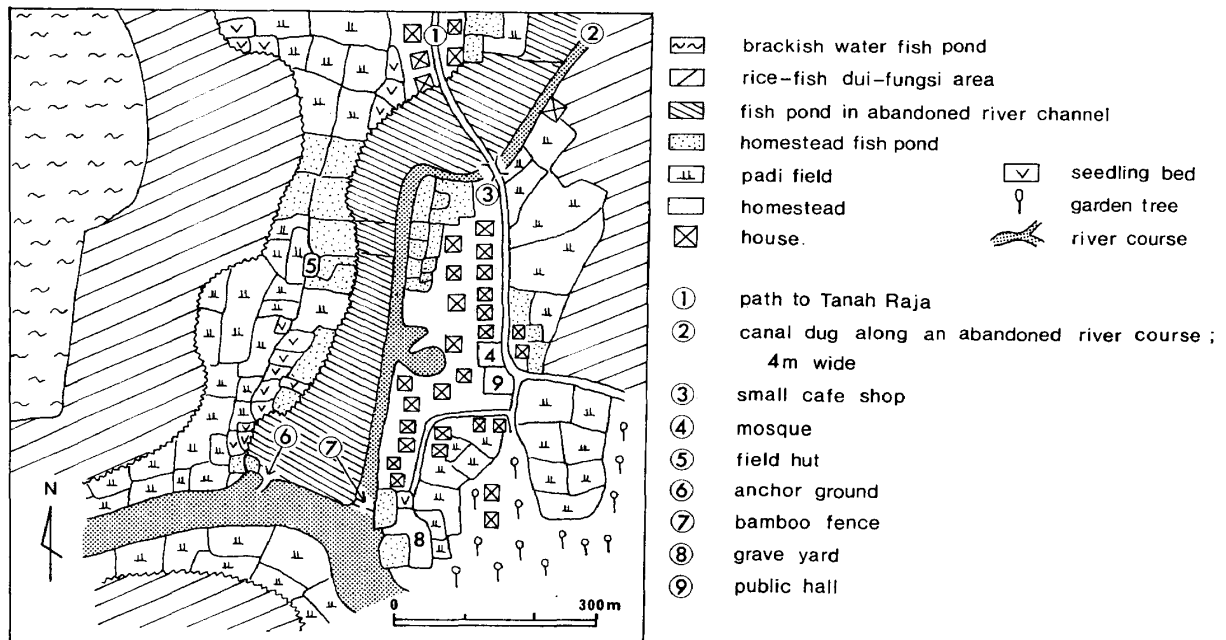


図4 カンボン・ピアラ付近の土地利用

掘り込まれた用水池である。と同時に家のオカズ用の魚を飼っている。しばしば、こうした池のまわりには、ココヤシやマンゴーなどの果樹が植えられ、また小さい菜園が作られている。自然堤防の上は上記のように多方面にわたる機能を有しており、地元の人にいわせると、ここほど三角州上で価値の高いところはないという。

すでに述べたように、この三角州には、500-600年の昔から古ラバカン、シアン、パチェロンなどの港が開け、それらが小王都として栄えたといわれている。これらの古い港はそれが栄えた当時、結局いまのピアラに似たようなところであったのではなかろうか。こうした環境のところなら、それは港としても、また生産の場としても理想的である。

b) 最近の変容

16世紀のシアン王国当時、すでにここには養魚が行われていたという (Ohara 氏未発表資料)。もっともしかし、当時の養魚が実際にどの程度のものであったかは、いまのと

ころ不明である。ラバッカンの郡長 (camat) によると、1968年までは、養魚といってもそれはいわば、自然に入り込んでくる雑多な魚を囲い込んでいる程度にすぎなかったという。養魚が今日のような組織的なものに発展をとげるのは、いわゆる BIMAS プロジェクトで改良養魚法の普及が行われるようになってからだという。上記のプロジェクトはこのあたりでは1969年に始まっている。この時、いくつかのデモンストレーション養魚池が設けられ、肥料と稚魚とローンが導入され、養魚技術の革新がもたらされたのである。

養魚技術の向上にとって、しかし、最も決定的な意味を与えるようになったのは、1970年に始まる大排水路の建設であったという。この時、パンカジェネ県では延長59kmの水路が掘られた。この排水路開削の結果、干潮を利用すれば、干潟の大部分や潟の一部は、それを干し上げることができるようになった。これまでは通年湛水で手の施しようのなかったところが排水可能になり、それを踏まえて

初めて薬剤や肥料の投入などの高度な技術の導入が可能になったのである。また、安定した塩分濃度の確保も可能になった。後者は特にエビの商業的生産を可能にした。かくして、1971年にはエビの稚魚が初めて導入される。1974年には同県で初めて4トンのエビの出荷が行われている。そしてそれは翌1975年には20トンにはね上がり、その後も増加を続けている。残念ながら、しかし、1981年現在では生産過剰のために値くずれを起こしてしまっている。

養魚用排水路の掘削を軸にセットとして入ってきた養魚技術は、かくしてまたたく間に、それまでの半自然的で、どちらかといえば内水漁業に近かった養魚を一変させてしまうのである。折しも激増していた都市での魚需要は、この養魚業の組織的発展に拍車をかけた。こうした養魚の発展は潟だけにとどまらなかった。サバヒイが儲かるとなると、それまでの水田に例の溝がどんどん掘られ、いわゆる養魚・稲作二重機能区が生れてくる。

パンカジェネ河口には、すでにラバッカ王国の昔から外国の大船が到来している。考えてみると、ここはすでに大昔から外部に開いた、したがって市場経済に敏感に変応するところであった。この特性はいまも失われていないらしい。この河口の企業的な性格は、今日では激増する養魚池というかたちで明瞭に認められるのである。

III パンカジェネ流域の土地利用

III-i 中間地帯の一例としてのパチュール

今日のパンカジェネ流域には、上流山地にあるバンティムルンと下流三角州にあるラバッカの間に、その中間地帯というようなものがある。それは一種の新開地である。ここでは、デサ・トンドン (Desa Tondong) 中の

カンボン・パチュール (Kampung Pacur) を例に、その様子をみてみたい。

1950年以前

現在のパチュールは30戸の人家を持ち、棚田が見事に発達している。しかし、1950年以前には、ここには人家も棚田もなかった。そのころ、この土地は、ここより約3km東にあるカンボン・トンドンに属する森林で、トンドンの人たちによってトウモロコシと陸稲を主体とする焼畑が行われていた。9月から10月にかけて藪払いと火入れを終え、11月にトウモロコシを播いた。1m間隔ぐらいに播き、1カ月ぐらいして背が伸びると、そのトウモロコシの間に赤米を点播した。トウモロコシは1月から2月にかけて収穫したが、そのあとで稲は成長を続け、4月に収穫された。こうして1作すると、翌年はもうそこを放棄してほかの場所に耕地を移し、3年後にはまた元に戻るという方法をとっていた。

本拠地のトンドン自体は16世紀からある古い集落で、そこには古くからの水田があり、その土地利用のさまはバンティムルンのそれと同列に入るものである。明らかに山型の土地利用を持つ集落である。

開田の様子

1950年、カンボン・トンドンから初めて4人の人が、のちにパチュールになるこの土地に入植してきた。彼らのねらいは、この焼畑地に水田を開いて定着することであった。入植者たちは、1950年にかつての焼畑地に畦を築き、水田造成作業を行なった。彼らは水田造成の初年度から水稻を作ること考えた。しかし、これは成功しなかった。結局彼らが行なったことは、畦のある棚畑に乾粃を点播したことである。畦があるので、雨季の最盛期には湛水し、点播稲は水稻のように育った。ジャワで行なっているゴゴ・ランチャ (gogo ranca) と同じ栽培法を採用したのである。この方法は3カ年続いた。この新開田で、ふつう

の水稻移植が行われるようになったのは1954年からであった。

最初の4人の入植後、それを見習う入植者が漸次増加した。そして、1979年には、30戸の村に成長している。これらの後続者たちも先着者たちと同じような手法で、次々とかつての焼畑を棚田に変えていったのである。

今日ここで行われている稲作は、すでに完全な水稻技術のそれである。すなわち、最初に縦横各1回の犁耕、その後の牛に曳かせたエッスによる碎土、続いて再度の犁耕1回、そして最後に馬鍬がけである。12月にこの本田準備を完了し、同月中に植えられるところが多い。収穫は4月から5月にかけてである。一部の田では裏作として緑豆やサツマイモが作られる。

今日の変化

ところで、1980年になって、この村はまた急激にその人口を増やそうとしている。政府の移住計画にそって、辺境の集落からの入植が押し進められているからである。すでに何十戸かの入植者用の家が政府の手によって建てられており、計画によると、近々50家族がここに移転させられるのだという。計画ではデサ・トンドン中であまりに辺境に位置している2,3の小集落は、この際このパチュールに集結して、ここを立派な水稻集落に作り上げようというのだという。この計画には種々の問題もあって、現在の進捗状況は必ずしもスムーズではない。しかし、それにもかかわらず、遠隔地の山村が道路ぞいへ移動するという潮流はすでに動き出している。単に政府がそういう決定を下したというだけでなく、大勢としては、すでに農民自身がそれを望んでいるからである。

上のパチュールの例でもみたように、中間地帯の特徴は新開水田の発生とその急激な拡張である。すでにバンティムルンでガルン・バッカ、すなわち新開田のことを述べたが、

土地の人たちがガルン・バッカという言葉聞いた時、最初に頭に描くのは、あのバンティムルンの棚田ではなく、この中間地帯の棚田のことなのである。中間地帯こそが、まさにガルン・バッカ地帯なのである。

こういう視点に立ってみてみると、バンティムルンの非石灰岩地帯の棚田は、こういう広範にわたる中間地帯の一部だと考えることもできる。あるいはまた、バンティムルンのような古い集落の近辺で起こり出した変化が、いま急にこういう中間地帯といわれるところに広がり出した、と考えてもよいのかもしれない。

III-ii 山地と海岸

この小論を閉じるにあたって、山地と海岸の対照をいささか文化史的な観点からみておきたい。

山地の本来の生産基盤は焼畑と湿田であった。ここでみられるものは古式であり、かつ孤立的、自閉的でした。例えば、稲作技術では例のアポッチャによる地ごしらえなど、極めて特異なものがみられた。そのほか多くの稲作儀礼がみられる。これらは総て稲作の古い発生と外部からの攪乱のない長い伝統を想わせる。中でも、田植えの日に貴族たちがカラエンの田で共食を行うのは、私にはトラジャ (Toraja) 族の類似の儀礼を思い出させて大変興味深い。

ところで、ここであつにも孤立的、自閉的という言葉を用いたが、よく考えてみると、これは正しくない表現のようである。例の共食がトラジャを連想させるといったが、トラジャを連想させるものは共食だけではない。蹄耕自体がそうである。蹄耕といえば、さらに、タチピ (Taciپی) やボネ (Bone) 台地にも広く分布している。⁵⁾ 蹄耕はアポッチャ

5) このことに関しては、本特集の古川論文「南スラウェシの稲作景観」を参照されよ。

と本質的に同類とみてよいであろう。こうしてみると、一見切り離されて、孤立しているかに見えるバンティムルンの儀礼や農法も、結局は山地にかなり普遍的に存在している農耕文化複合の一員ということになってくる。

一方、海岸は古い港町の存在が端的に示すごとく、昔から外部に開いた空間であった。その地理的環境に支配されてであろうか、海岸低地では稲作自体も極めてコスモポリタンな性格が強い。例えば、早くからの犁の使用は証拠の一つとして挙げることができる。2頭の牛に曳かせるマレー犁の構造といい、それがラッカラと呼ばれる事実といい、この技術がインド系技術の移入であることは確実に想像がつく。

農耕儀礼がまたインド的である。例えば、ラバッカにみられるパリリ (palili) と呼ばれる始耕祭の様子は次の通りである。すなわち、その日、王の家（いまでは郡長の家）を出た一行は、カラシアロ (karasialo) と呼ばれる一日王に導かれて、各種の宝物、什器を捧げ持ち、約 1 km 先の王の田に向かう。この時、宝物、什器に混じって、犁と穂つきの粃が運ばれてゆく。そして、王の田にいたる

と、ここで一日王は犁で田を3回すく。この行事は、大陸部東南アジアに広く分布するインド起源の始耕祭と、その基本はほとんど変わらない。こうして、海岸低地の稲作は、技術といい儀礼といい、すぐれてインド的なのである。

以上のようなことを考えてみると、私は次のような結論を下してみたいのである。すなわち、山と海との対置は、固有のマレー型農耕文化と、インド型農耕文化との対置としてとらえることができるのである。いささかの危険を承知でさらにつけ加えると、前者は踏耕、移植稲作を中心とした農耕文化であり、後者は犁耕を軸とした農耕文化であるということにもなる。過去数十年の顕著な変化は、こうした二つの農耕文化の間で、後者の諸要素が前者の地域をも大幅に席卷しているということである。

参 考 文 献

- Pelras, C. 1974. [Herbe divine], le Riz chez les Bugis (Indonésie). *Etudes rurales* 53・54・55・56. pp. 357-374.